

私の父親は、明治生まれの旧家の次男坊で、鉄道員でしたが、家での食事の時に「頂きます」とか「ごちそうさま」と云うような言葉を発しない人でした。それに対して、小学校の先生だった母親も注文をつけるようなことをしなかった為か、私は、世の中で、そういう言葉が、普通に使われているということ、小学校へ上がるまで知らなかったように思います。

それで、何故それを家では言わないのか、父親に聞いたことがありますが、父親の返事は、「大事なのは心で、言葉や見せかけの態度だけでは駄目だ」だったと記憶しています。その時は、説明はなかったと思いますが、「食事を作ってくれた人への感謝」、「ご先祖様や世の中の人のお陰で生きていることへの感謝」、「農家や、米に限らず、人々の生活のために、働いてくれている人への感謝」、「その感謝の気持ちを忘れてはならず、それに応えるような心でなければいけない」ということを、言いたかったのだと思います

そんな父親が、80歳で亡くなる20年前の還暦の頃に、60年を振り返り、文章を書いているのですが、その一部に、我々姉兄弟3人の子供たちに宛てた遺言があり、「遺言を言えるような人間ではない敗者だが、と断りながら、「姉兄弟3人には、世の例と同じにならず、それぞれが家庭を持ち、時間がたっても、いつまでも、<一心同体>の気持ちを持ち続けてほしい」とあるのを、実家整理の中で見つけた書類を見ていて、私が確認したのが、80歳を過ぎてからであったのは面白く、それが事実だと云う事ですが、これは、弟から受け継いで、単独所有者として管理していた実家を今年売却した私に、良いヒントを与えてくれました。そして、<一心同体>感を取り戻したいと思ったのですが、

亡父母弟を想う盆の季節を迎えて、4週間の入院から退院した後の経過も順調で、100歳を目指す私と、米寿を控えて元気である姉とに、共通した事柄は何かと考えていて、最近のテレビでの高齢者向け保険の紹介番組で、申込者モデルが言う「葬儀代ぐらいは残しておきたい」を、保険とは別に実現しようと思ったのでした。二人とも元気で、持ち家に住んでいるものの、入ったお金は有効活用して、残らない生活をしていると思ったからです。

それで、先祖から受け継いだ土地と父母の家を売却して入ったお金は、思いのほか少ないものでしたが、元々当てにはしておらず、父母からのめぐみと思い、それを共に享受すべく、一部を分けて、姉の健康を祝おうと決めたのが、首記の句になったのでした。因みに、姉に対する一心同体感の原点としては、幼い日に、母親が出勤中の昼間、姉と私の食事の世話や家事をするために来ていた<ねえや>が、姉に意地悪をしているのに気付き、私が長い物差しを握ってねえやを家中追いかけて、懲らしめた思い出があります。 以上